

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720070
 研究課題名（和文）20世紀初頭ロシアにおける人間観と＜新しい人間＞の創造をめぐる論争
 研究課題名（英文）The View of Man and Controversies over the <New Man> in Early Twentieth Century Russia.
 研究代表者
 佐藤 正則（SATO MASANORI）
 九州大学・大学院言語文化研究院・准教授
 研究者番号：10346843

研究成果の概要：

20世紀初頭ロシアのさまざまな思想潮流に、近代的世界観を超越した＜新しい人間＞を創造しようとする志向が共通して見られることを明らかにした。また、この時期の諸潮流間の論争を＜新しい人間＞のあり方やその創造手段、それが立脚する世界観をめぐる論争としてとらえなおした。さらに、＜新しい人間＞の創造をめぐる論争という新たな視角を導入することによって、20世紀初頭ロシア思想・文化史の新たな枠組みの構築を試みた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：ロシア思想・文化史

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア、思想史、哲学、文学、20世紀

1. 研究開始当初の背景

ソ連邦の消滅に伴い、20世紀初頭ロシア思想・文化史の従来の図式は妥当性を失い、新たな枠組の構築が待望されているが、国内外いずれにおいてもいまだ実現していない。本研究代表者佐藤正則は、平成15-17年度科学研究費補助金研究（若手研究（B））において、＜近代の超克＞、＜新しい世界観＞の模

索と論争という独自の視角から、**20世紀初頭ロシア思想・文化史の新たな枠組の構築**を試みてきた。その過程で、この視角の有効性は立証されたが、同時に、新たな枠組の完成のためには、**新たな世界観の中核としての人間観、世界における人間の位置づけ、＜新しい世界観＞を体現する＜新しい人間＞の理念とその創造手段**、の2点に絞ってさらに

詳細な研究が必要であるとの認識に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、<新しい人間>とその創造をめぐる論争の視角から、20世紀初頭 - 1910年代ロシア文化・思想史を再構築することにある。具体的には以下の3点である。

(1) 20世紀初頭 - 1910年代ロシア諸思想潮流における新たな人間観の解明

さまざまな知的潮流（マルクス主義、新カント派、神秘主義、宗教思想、象徴主義など）において、近代を超越する新たな世界観の模索の中でどのような新たな人間観が築かれたのかを、解明する。

(2) <新しい人間>をめぐる論争の跡づけ：論点と論争の構図の明確化

知識人間で展開された論争を、人間観の相違と<新しい人間>の理念とその創造手段という観点からとらえなおし、論争の論点と対立点、論争の構図を明確なものとする。

(3) 20世紀初頭 - 1910年代ロシア文化・思想史の新たな枠組の構築、ソ連期文化への展望

上記の(1)(2)を踏まえ、<近代の超越>、<新しい世界観>と<新しい人間>の構築をめぐる論争という観点から、20世紀初頭 - 1910年代ロシア文化・思想史の新たな枠組を構築する。同時に、1920 - 30年代のソ連期文化に対する新たな視座について展望する。

3. 研究の方法

(1) 研究の具体的内容

本研究は大きく3つの段階に分けておこなわれた。下記の は平成18年度、 は平成19年度、 は平成20年度におおむね該当

する。

20世紀初頭ロシア諸潮流における新たな人間観：その共通性と多様性

さまざまな知的潮流・運動において、近代を超越する新たな世界観を模索する中でどのような新たな人間観が形成されたのかを明らかにすることを試みた。おもにとりあげた潮流は、マルクス主義、新カント派観念論、神秘主義、宗教思想、象徴主義芸術運動などであった。具体的に解明を試みたのは以下の3点であった。それぞれの思想潮流における人間観、それぞれの思想潮流における創造されるべき<新しい人間>のイメージ、人間観が立脚する世界観とその中での人間の位置づけと役割。

<新しい人間>をめぐる論争：論点と論争の構図

上記の の成果を受け、諸潮流の内部、また諸潮流間における人間観の相違点を明確なものとし、<新しい人間>をめぐるいくつかの特征的論争の展開を具体的に追跡し、論争の論点、構図を明確化することを試みた。まず、当時の諸潮流間の論争の中で、特に人間観が論点であることが明白なものについて、論争の基本構図の整理をおこなった。

さらに、表層に現れる論点が人間観をめぐるものではない論争についても、人間観の相違という視角を導入することでどのような異なる解釈が可能となるのかを試行した。

また、諸潮流における人間観をより明瞭なものとするために、<新しい人間>の実現手段についての諸潮流の理念、<新しい人間>の創造を目的とした具体的な実験を跡づけた。とくに、<新しい人間>の創造手段として、象徴主義やアヴァンギャルドといった芸術理論家ばかりではなく、宗教思想家さらにはマルクス主義者（ポリシェヴィキ）からも注目されていた演劇 = 祝祭の理論と実践に

ついで、諸潮流間の共通性と相違点、相互交流と論争を跡づけた。

20世紀初頭ロシア文化・思想史の新たな枠組の構築：ソ連文化への展望

上記の、の研究成果を受け、近代を超越する〈新たな世界観〉とそれを体現した〈新しい人間〉の創造の理念とその創造手段をめぐる論争という新たな視角から、20世紀初頭ロシア思想・文化史を再構築することを試みた。

さらに1930年代ソ連期文化を展望し、20世紀初頭から1930年代までを包括的に把握できる視座の可能性を考察した。

(2) 研究の手法と視角

本研究は、20世紀初頭ロシア思想・文化関係の広範な資料を必要とした。とくに論争の多くは雑誌上で展開されており、論争を跡づけるには当時の雑誌等のマイクロ資料の入手が不可欠であった。こうした資料の収集にあたっては、20世紀初頭 - 1910年代ロシア思想・文化関係雑誌マイクロ資料を購入し、また20世紀ロシア文化・文学関係の原典資料の豊富な早稲田大学・東京大学図書館での資料収集をおこなった。

また、研究の遂行にあたっては、以下の視点を導入した。

哲学・政治・芸術運動の連関的把握

哲学・政治・芸術運動を、別個の領域としてではなく、同一文脈上で関連させて検討する。とくに象徴主義を、狭義の芸術理論としてではなく、包括的な世界観・現実的世界変革理論としてとらえる。

思想・文化史の新しい動態的な枠組

従来の固定化された分類方法を廃し、新たな観点から既存の図式の大膽な組み替えを試みる。表層の活動分野の違いや抽象的認識理論の相違に基づく静態的図式ではなく、論

争を軸とした動態的な思想・文化史を構築する。

〈近代の超克〉の視座、ロシア特殊論からの解放

〈近代の超克〉の視点を導入し、ロシア思想・文化史を〈ロシア的特殊性〉によって説明する旧来の研究をしりぞけ、ロシア思想を西欧思想との連動と相互作用の局面でとらえる。

4. 研究成果

(1) 20世紀初頭ロシア諸思想潮流における新しい人間観と、それが立脚する世界観

立場の異なる諸潮流（マルクス主義、新カント派観念論、神秘主義、宗教思想、象徴主義芸術運動など）において、新たな世界観、新たな人間観を構築しようとする試みが共通して見られることを示した。

その際、思想的立場の違いにもかかわらず、これらの潮流において、〈新しい人間〉が立脚する世界観についていくつかの共通点が存在することを明らかにした。とりわけ重要な共通点として、直観哲学、新たな〈実在論〉を指摘した。

直観哲学

直観哲学は、人間が形而上学的本質世界を直接的に把握できるとする立場であるが、これに着眼したものとして、ロースキー、マルクス主義から観念論・宗教哲学へと転換したベルジャーエフ、さらに象徴主義者たちがあげられる。

彼らの直観哲学への着眼に、近代西欧的な主客・物心二元論と不可知論とを克服した一元論的な世界観と人間観への希求が存在しており、また個的人格を形而上学的存在との直接的結合によって根拠づけようとする新

たな人間観の構築への志向があることが明らかとなった。

新たな<実在論>

当時の主要な諸潮流（観念論哲学、宗教思想、象徴主義芸術運動、マルクス主義）に、新たな<実在論>の探究が共通して存在することを示した。

さらに、<実在論>と<実在性>の意味内容や<実在性>と人間との関係についての見解はそれぞれの思想的立場により異なるものの、にもかかわらず、いずれの潮流においても共通して、この新しい<実在論>が近代的な主客二元論と近代的個人主義を克服し、<新しい人間>の礎を成すものとみなされていたことを解明した。

(2) <新しい人間>をめぐる論争

20世紀初頭のロシアの知識社会で展開された代表的論争のいくつかは、近代的世界観と人間観の動揺を背景としたものであり、<新しい人間>の創造とそれを裏づける哲学的世界観の構築という共通の課題を持っていたこと、その共通課題の解決の方向性をめぐる論争という側面を持っていたことを明らかにした。

そうした論争としては以下のものがあげられる。象徴主義内部での芸術理論と哲学面での論争、観念論・宗教哲学者と象徴主義者との論争、象徴主義者・観念論哲学者とマルクス主義者との論争。

これらの論争はいずれも、従来は、人間観の観点からとらえられることはなかった。

象徴主義内部での芸術理論と哲学面での論争

従来は象徴主義運動内での世代間対立として理解されることが主流であったが、本研究では、<神秘的アナキズム>が論争の発端の一つであった点に着目することで、個的

人格の形而上学的裏づけと<実在性>概念、世界と人間との関係をめぐる論争としてとらえなおした。

観念論・宗教哲学者と象徴主義者（前期・後期それぞれ）との論争

観念論・宗教哲学者ベルジャーエフと後期象徴主義者イヴァノフ、チュルコフらが、ともに<実在論>を志向しながらも、両者の間に、<実在性>概念、世界と人間との関係性の理解において大きな相違があったことを明らかにした。

象徴主義者・観念論哲学者とマルクス主義者との論争

20世紀初頭に登場した新しい思想潮流（観念論や象徴主義）はマルクス主義者とは表面上は激しく対立していた。しかし前者のうちベルジャーエフや後期象徴主義者たちが新たな<実在論>を提唱していること、また後者の内、論集『実在論的世界観概説』、『文学の崩壊』に拠った一派もまた<実在論>を標榜したことに着眼し、両者の論争を、<実在性>概念の理解、世界と人間との関係をめぐる論争としてとらえなおした。

(3) 20世紀初頭 - 1910年代ロシア文化・思想史の新たな枠組の構築

20世紀初頭ロシア思想・文化史を、近代を超克する<新たな世界観>とそれを体現した<新しい人間>の創造の理念およびそれをめぐる論争という視角から、再構築した。その際、従来の固定化された分類方法を廃し、新たな観点から既存の図式を組み替え、表層の活動分野の違いや抽象的認識理論の相違に基づく静態的図式ではなく、論争を軸とした動的な思想・文化史の記述を試みた。従来の通説では、20世紀初頭のロシア思想の特徴は実証主義・唯物論・無神論から観念論・宗教哲学・神秘思想への転換とされ、当

時の知識人の間での論争（主に新しい思想潮流とマルクス主義との間での）は、新しい観念論哲学と古い唯物論との対立として理解されてきた。

本研究では、こうしたこれまでの図式を一面的なものとして廃し、当時の主要な諸潮流（観念論哲学、宗教思想、象徴主義芸術運動、マルクス主義）のいずれにおいても新たな〈実在論〉の探究が共通して見受けられる点、その際、この新たな〈実在論〉が近代的な主客二元論を解消すると同時に近代的個人主義を克服した新しい共同体を実現する〈新しい人間〉の礎を成すものとみなされていた点に着眼し、20世紀初頭のロシア思想を新たな〈実在論〉の探究と模索と特徴づけ、観念論哲学・象徴主義とマルクス主義との間の論争、また象徴主義内部の論争を、精神的危機意識と新たな〈実在論〉の渴望という共通基盤の上での〈実在性〉概念の理解と〈実在論〉のあり方の方向性をめぐる論争としてとらえなおした。

こうした本研究の成果をまとめた論考を現在準備中である。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

該当なし

6．研究組織

(1)研究代表者

佐藤 正則 (SATO MASANORI)

九州大学・大学院言語文化研究院・准教授

研究者番号：10346843